

### J.S.バッハ:トッカータ BWV914

BWV910～916 までの 7 曲のトッカータはワイマール時代もしくはそれ以前の作と推測され、若きバッハの情熱を伝える貴重な作品群である。BWV914 は 7 曲の中では最も短く、1710 年頃の作とされる。全体は 4 部で構成され、個性的なモチーフの序奏に始まり、第 1 フーガは優雅な二重フーガ、間奏部のアンダンテでは強い感情が表出され、その印象を引き継ぎながら三声の鮮やかな第 2 フーガで締めくくる。

### F.クーペラン:《クラヴサン曲集 第 1 巻》第 1 組曲 より

ルイ 14 世に仕えたフランス・バロック時代の巨星フランソワ・クーペランの《クラヴサン曲集》(全 27 組曲)は 1713～30 年までに 4 巻に分けて出版された。第 1 巻では、全 72 曲が 5 つの組曲(オールド)に収められ、各曲には舞曲名やエスプリのきいた標題が付けられている。18 世紀フランス・クラヴサン音楽の頂点を築く曲集であり、組曲といってもバッハのように構築された完結性は持たず、言わば珠玉の名品が集められた宝石箱を覗くような印象である。

### ラモー:《運指のメソッド付きクラヴサン曲集》より

F.クーペランと並んでフランスのバロック音楽を代表するジャン＝フィリップ・ラモーは、ルイ 15 世の治世に活躍した。その後半生はオペラに捧げられており、クラヴサン作品が書かれたのは、下積み時代とも言える前半生のこと。クラヴサン曲集の 2 巻目、《運指のメソッド付きクラヴサン曲集》は 1724 年に出版された。ラモーは機能と和声を最初に体系化した音楽理論家としても知られており、クラヴサン作品における旋律や展開のダイナミズム、斬新さは今なお色褪せていない。

### A.フォルクレ(J-B.フォルクレ編):

#### 《父フォルクレによるヴィオール曲集クラヴサン用編曲集》第 5 組曲 より

ルイ 14 世の治世に、マラン・マレと並んでフランスのヴィオール(ヴィオラ・ダ・ガンバ)界を代表するヴィルトゥオーゾとして知られたのが、アントワヌ・フォルクレ。彼が作曲した 30 曲ほどのヴィオール作品は生前には出版されなかったが、息子のジャン＝バティスト・フォルクレによって、父アントワヌ没後の 1747 年、全 32 曲(うち 3 曲はジャン＝バティストのオリジナル)が 5 つの組曲にまとめられて世に出され、さらにジャン＝バティストによってクラヴサン独奏用にも編曲された。

### J.デュフリ:《クラヴサン曲集》第 3 巻 より

フランス革命の口火を切ったバスティーユ襲撃(1789 年 7 月 14 日)の翌日に没したジャック・デュフリは、フランス王朝文化とともに生涯を終えた作曲家。その晩年には、すでにクラヴサンはピアノへと鍵盤楽器の主座を明け渡しつつあった。デュフリは《クラヴサン曲集》を 4 巻出しており、第 3 巻(全 17 曲)は 1756 年の出版。音楽史的には、バロックから古典派への過渡期にあたり、クーペランやラモーの伝統を受け継ぎながらも、独自のスタイルが追究されている。

### J-N-P.ロワイエ:《クラヴサン曲集》第 1 巻 より

ジョゼフ＝ニコラ＝パンクラス・ロワイエはルイ 15 世に仕えた音楽家。王家の子女のクラヴ

サン教師を務め、コンセール・スピリチュエルの運営にも関わった。オペラ作曲家として華々しく活躍したが、今日それらの作品は上演機会に恵まれておらず、1746年に出版された《クラヴサン曲集》第1巻(全14曲)が彼の代表作となっている。自身のオペラからの編曲も多く、とくに曲集の最後を飾る「スキタイ人の行進」は、華麗な技巧から今でも演奏機会が多い人気曲である。